

収益性の高いかんしょ経営体の育成

鹿行農林事務所経営・普及部門

銚田市は全国一位の産出額を誇るかんしょ産地であり、大規模経営体が多い地域です。経営体の収益性向上には、収量の確保はもちろん、労力負担軽減、農地の確保も重要です。特に大規模経営体では、生産に必要な農業用ポリエチレンフィルムの除去作業負担やマルチ処理費用が課題となっています。さらに、近年、夏季の高温乾燥による病害虫被害の拡大や品質不良芋の発生が問題となっています。これらの問題解決に向け、収穫作業の省力化、夏季高温時の地温抑制や水分確保、多発する病害虫への対策を講じて収量や品質を安定的に確保する技術導入の支援に取り組みしました。

収穫作業の省力化及び高温対策

土壌中で分解して除去作業が不要となる生分解性マルチについて、マルチ下の土壌環境や収量・品質に与える影響を調査しました。その結果、マルチ除去コスト削減に加え、特に早期に分解した生分解性マルチでは畝内の水分率が高まり、地温も下がることを確認しました（データ略）。さらにその中でも安定して慣行マルチ（農ポリ）と同等以上の収量を確保できた1種類（図1）を市内での利用に適した生分解性マルチとして選定し、栽培マニュアルを作成しました。

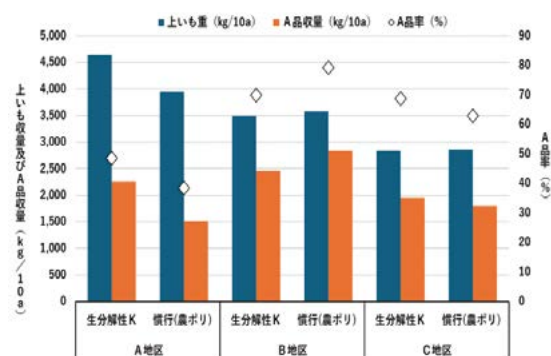


図1 選定した生分解性マルチでの収量・品質



図2 畑地化水田ほ場の収穫芋の様子（9月末）

畑地化水田ほ場での栽培適性確認

銚田市ではかんしょの作付面積の増加に伴い、栽培に適したほ場の確保が課題となっています。そこで、夏季高温時でも水分を確保しやすい遊休水田に着目し、水田畑地化推進事業を活用した畑地化水田において「べにはるか」を栽培し、収量や品質を調査しました。その結果、比較した畑地には及ばなかったものの2.6t/10a（図2）と県標準収量（2.5～3.0t/10a）を確保でき、経営的に成り立つことが確認できました。8月には生産者や関係機関を参集して現地検討会を開催しました。

気候変動に対応した安定生産技術推進

近年の夏季高温乾燥の影響により、病害虫は発生が前進化、多発化しています。そこで、生産者にナカジロシタバ、ヒルガオハモグリガの防除資料を配布し、早期防除の徹底を呼び掛けました。さらに立枯病については、土壌くん蒸剤の効果を高める難透過性フィルムを前年多発ほ場で試験してその有用性を確認するとともに（図3）、次年度に向けた対策資料を配布しました。

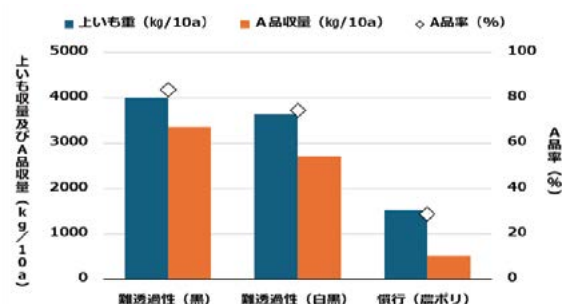


図3 前年立枯病多発ほ場での難透過性フィルムの効果